

# からすアートスペース 阿佐ヶ谷に近日オープン 豆電球?

こけら落としは

## アートな心を持つ スポンサー大々募集 art@go-karasu.com



第6巻第1号  
通巻第61号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番4号 〒166-0015からす新聞本社  
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

**今日の紙面から**

- 二面 ロンドン・レポート  
松本と話をしようパンパン
- 三画 からすライブラリー  
『CD』 『CD』 『CD』
- 本 『蛇にヒアス』
- 四画(国際アート画)  
holia
- 五画(語面)  
someeとannyの怪

昔から様々な音楽が家の中を流れていた。中には私を大いに魅了したものも少なくない。例えば、ジョージ・ルイスやグッドマンのような古いところやブルーベックやマイルスといった在当时としては新しい目のジャズであったり、パッパにヴェルディ、フォーレにプロコフィエフといった所謂クラシックもの、あるいはピアフ、将又フアン・タリエンソ、などなど。父の仕事の関係で日本のフォークとの付き合いも浅くはない。その合間には、テレビでGSや歌謡曲。そうそう、台所で母が口遊む唱歌やカントーネも忘れてはいけない。正しく鳥なみの雑食ぶり。

記憶に鮮明に残っているものを並べただけでこんな具合であるからして、実際にはさらに多くの音楽が... 加えて、圓生や虎造なども... 音が... 加えて、圓生や虎造なども... 音が... 加えて、圓生や虎造なども...

私が家を満たしていたのである。どこがどう気に入ったのか、なぜ未だに鼻歌で唄ってしまうことがあるほどにどこか奥深くに刷り込まれてしまったのか、知る由もない。

かれこれ十年以上も前のこと、とぼけたイタリア青年と頻りに顔を合わせた時期がある。高円寺のガード沿いをちょいと折れたところにあつたロック飲み屋である日、その日は珍しくレゲエで盛り上がっていた。爆音に包まれ、酔っ払い仲間の胸間声、嬌声に包まれてときげんな私のもとに、アントニオが近寄ってきた。

「なあ、ゼンタ、この歌の意味、どのくらいわかるんだい」

泥酔してぼやんぼやんの意識をどうにか集中させて耳を聴かせる。かかっていたのはジャマイカ訛りのジャージャー言つばかりのラスタもの、今でいうDJのテイストもあり、相当地聴き取りにくい。

「せいぜい五〇パーセントくらいかなあ」と答える私。

「君もそうか。ぼくもそれくらいだよ。意味はよくわかんなくても、楽しいならいいよね」

イタリア人と日本人がジャマイカ音楽の怪しげな英語の歌詞について拙い英語で語り合った結論は、楽しいならいいよねという一言で括られた。ま、確かに楽ししゃそれでいいんだけど。

言葉や理論などわからなくても、音楽は国境を越え、人種や民族、年齢の長幼を超え、人々の心に訴えかけていく。何とも素晴らしいことではないか、と言つのは如何にも簡単なことである。しかし、よくよく考えてみると、それほど単純な話ではないのではなからうか。

以前、鎮魂を意図して書いた、レクイエムに相当する曲がある。制作の過程でそれを耳にしたある女性が意外な感想を述べてくれた、「素敵な曲です。危険な大人の恋って感じ」と。コントだったから、ここでのけ反って椅子から転げ落ちる場面かもしれない。私が失われた多くの命を念頭に置き

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

# London Report

## 新しく

さて、少し前に新しく年が明け  
て2004年に。でもいったい、年  
が明けるってどういう事なんだろう  
か？ 数字的に言えば、年号が変わっ  
て一つ歴史が増えるということなの  
か。でも何てこたあない、ただ昨日  
から今日になっただけ。夜が明け  
りゃあ、はい2004年ですってな  
具合。単純に考えるならば、その一  
日の区切りが他の日より大きいと言つ事なの  
だろう。一年、春夏秋冬、一月、二月、三月  
…、一週間。僕らの日常は、そんな時間の区切  
りの中で回っている。時間を区切ることにより  
けじめをつけ、色々な物ごとを進めて行くのだ  
ろう。先日、何となく暇だったので自分の日記  
の様なものを読み返してみた。2003年はど  
んな年だったのだろう？ と言つ気持ち。余り  
書いていない日記にも関わらず、なんだか懐か  
しい。しかも自分の日記なので、その時、その  
場所の空気や温度、思ったことなど、本当に実  
に細かく頭に蘇る。「ああ、そんな事あった  
なあ」とか、「あの時はやけに嬉しかったなあ」  
とか、たわいのない日常の事ばかり。しかも、  
自分のいい時の方が日記を書いている打率が多  
いので、不思議と元気づけられてしまう。日記  
という形体からか、当たり前前にそこから時間  
の区切りが感じられる。

では、その時間の区切りが無くなってしまっ  
たらどうなるのだろうか？ 流石に世の中全体が  
そうなることはあり得ないだろうし、ちょっと  
想像もつかないが、個人レベルでの話だったら  
想像がつく。学生という身分からか、夜中に自  
分の事をする習慣がある僕は、しばしば昼夜が  
逆転してしまうことがある。元から朝起きるの  
が苦手なのも手伝い、学校に行くはずだった日  
の夕方に目が覚めたりするとかかなり自分でも反

省する。そう言えば、朝起きられないという病  
気の人の話も聞いたことがある。そこで、少し  
インターネットで調べてみた。なんでも、幾つ  
かのホームページによると、やっぱり申し訳程  
度には病気と言え物のように、なんでも眠り  
をつかさどる、促進する脳内物質が多く出すぎ  
てしまつてそうなるらしい。反対に不眠症の人  
もそんな人を起きた状態に保つ興奮剤のような  
物質が脳内で普通よりも多く作られていると  
言つた具合。そんな人が、生活が不規則だつた  
り、低血圧だつたりすると、大変に起きられな  
いらしい。鬱病と原理は同じなのかと思いつつ  
納得。するとその先に、もっと興味深いコラ  
ムを見つけた。要約すると、筆者自身も、起きら  
れない「人間である。起きられないのは病気で  
はなく、ましてや睡眠不足とか、低血圧だと  
か、そんなに単純に区切れる問題ではない。睡  
眠は人間にとって大切な欲求の一つで、その快  
楽は麻薬のように強烈なのだ。朝、起きられな  
くて、学校や仕事に行けない人間は、学校や仕  
事が重要ではなく、社会に重要だと悟られて  
いるだけで、本人の中では軽視されているの  
だ。仕事が生計にはかかせないと思つていて  
も、実はその仕事が嫌い、又はどうでもよく、  
他にやりたい事、夢があったりするとますます  
起きるのは難しい。そういう人は、病院に行く  
時には、あなたは起きられない病気で」と言わ  
れることの方が睡眠よりも重要なので、しっか  
りと起きるらしい。早い話が、睡眠よりも重要  
な事があれば起きると言つもの。そんな日常を  
見つめよう、とコラムは締めくくられる。

い。今でも、そんなゆとりは人生に必要なと  
思つのだが、日常の時間のけじめにまでそれ  
を適用するのは大間違いである。  
少し話を元に戻そう。時間の区切りの話  
そんな事をインターネットで発見し、改めて  
自分を見つめ直した数日後に、年が明けた。  
2004年。日記を読み直しながら、僕はそ  
んな時間の区切りを改めて肌で感じた。20  
03年の365分の1に元気づけられたりし  
ながら、一年の四季の移り変わり。一ヶ月の  
中の毎週。一週間の中の毎日。今日。そして  
明日。その時間の区切りがあるからこそ、僕  
たちは毎年誕生日やお正月を祝える。そうし  
て生活、一つ一つを大切にできるのだ。例え  
ば休日の朝に起きて、部屋の掃除、洗濯をし  
て、昼ご飯を作る。そんな風に「大切じゃな  
い」とか「何とかなる」ではなく、小さな日常を  
時間の区切りによつて大切にしていきたい。  
そんな生き方は素敵だと、思った。「明日はあ  
なたの人  
生で一審  
新しい日  
だ」とは  
よく言つ  
た物だ  
と、感心  
する。先  
日、友達  
の家で飲  
み、その  
まま泊  
まった帰  
りに街に  
出ると、  
ロンドン  
はチャイ  
ニーズ・  
ニューイ  
ヤーのお



祝い事で、多くの人と出し物でにぎわつて  
いた。シャンシャンと鳴り響くドラムの音  
を聞きながら、朝の冷たい空気が心地よい。ふ  
と、仕事の任期が終わつて最近日本に帰国した  
友達のことを思い出した。二年間あつた彼の任  
期がいつの間にか終わつてしまつたように、今  
日が終わればまた、明日を迎えるのだろう。思  
いもがけず、新年をもう一度迎えながらそんな  
事を思った。世界中の色々な所で僕らは新しい  
日を迎える。「おはよう」とか「明けましておめ  
でとごさいます」とか、それぞれに挨拶を交  
わしながら。

お友達の今日はどんな日なのだろうか？  
みんなが幸せに過ごせる一年であればいいな  
と、そんな事を思つたのです。  
(神山朝人)

# 『Sepia / Coco Mbassi』

Tropical Music、2001年、68.819



CDs

フランスは音楽的に懐の深い国である。ジャズやジブシー音楽を取り込むのも早かったし、現代ではアフリカや中近東の音楽に対してたっぷり胸を開いている。アフリカのミュージシャンが欧米で紹介される時、往々にして、強烈なリズムを強調したものとなる。それほどかのリズムは強靱で魅力的なのだ。だが、現代ではアフリカン・ミュージックも多様に展開を見せている。カメルーンからやってきたココ・ムバシの音楽は、その美しい進化系のひとつである。しなやかなコーラス・ワーク。 unnecessaryなものを削ぎ落とした、ジャンルに囚われないアレンジ。それでいて、根底には呪術的な力強さが見え隠れ。止めることを忘させるような、気がつくと同じ地平をループし続けている私がかこにいる。

(全太)



Books

# 『蛇にピアス』

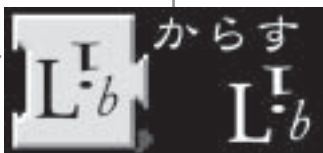
金原ひとみ

ISBN4-08-774683-6、2004年

最近、19才と21才の女の子が芥川賞をとったというので、大きなニュースとなっていたが、そのうちの二つがこの作品である。「りさたんりさたん」と騒いでいる野郎どもの中で、日影の存在になっているのが、金原ひとみ(21才)である。綿矢りさの方が若く、かわいく(?)、とつきやすい顔立ちをしているのに対して、金原ひとみ(21)はどこか影があり、ヤンキーっぽく見えるのだからしょうがないのだろう。

では、作品はどうかというと、両方とも読んでみたが、甲乙つけがたい。話の内容は全く異なるのだが、どこかお互い似ているような感じがする。すらすらと読めて、どこか人間のドロドロとした情念が淡々と描かれているところがそんなふうに感じさせるのだろうか。「蛇にピアス」は共感できないから、より好奇心がそえられる物語だった。主人公は18才の女の子で、舌にピアスをつけたり、入れ墨をしたり、体を売ったりと、とにかく、何故そんなことをするのか最後までまったくわからない。彼女は精神的にもどんどん追い込まれていく。何か自分を変えようとしているが、すべてが空回りしている。ところが、いつの間にか信頼していた男の死によって、状況が一転する。最後には、自分が信頼していた人間が死んでしまうことになり、希望はないままだが、生きようとする意志がそこはかとなく感じられるという、なんだか矛盾した、不思議な結末だった。うまく説明できないが、とにかく不思議なのである。金原ひとみ、注目のひとである。

(高橋)



# 『my puma's』 / puma社

<http://www.mypumas.com/>

くだらないCM、意味不明なCM、興味のわからないCM、とにかく私の中で好感を持ってない(他の人がどう思っているかは知らない)CMばかりが放送されているのだが、たまーに琴線に引っ掛かってくれるものがある。

最近のヒットは、pumaの「my puma's」。ピレスやブッフオンが自分の自慢のプーマを見せつけるのだが、これがバカなイギリス映画のようなノリの良さで、思わず鼻笑いを誘う。pumaのことになると大人も子供も関係ないような、溺愛っぷりで。ようは、感動モノよりは楽しいモノが好きなのだ。これがくだらないかと問われれば勿論くだらないし、意味不明といえばそうだし、人によっては全く興味など沸かないこともわかってはいるが、思わずその行動に出たくなる、マイ・プーマを履いて散歩をしたくなる、そういう意識を擦られるの、好きなんです。(と)



CFs

青

と

無色

全木

不倫

実

頭心

高橋礎生一

居残り

望二月

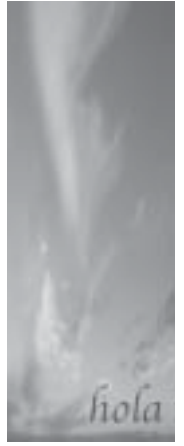
ち  
ちひろ

もて  
品

も  
し

あーこ

あめせん  
ケ



低い雲がたれ込めどんよりとした北フランスの街に、新たな風景をつくれるかどうか。アミアンの新しい美術館をつくるためのコンクールが終わった。フランスの思想家ロジェが、二本の木にひとつの枯れ枝を渡すという単純な所作で、自然の中に休息の場をつくったように、われわれの案もまた木のモチーフのファサードに床板を渡すという、至ってシンプルな建築行為によるものである。

天気が悪く日照時間が極めて少ないという環境に、内部の光が木々の枝葉を通して透け、街に向かつて発散されるというメッセージを提案した。森のなか木漏れ日の下を散策しているときれない花や木の実を見つけるような、それらが展示される絵画やデッサンというわけだが、楽しい空間を提供したいと考えた。美術館として必要なコントロールされた箱のような展示室や収蔵庫の他に、廊下のような移動のための空間や、エントランスホールのような人が溜まるような空間にも、それぞれ水平に長いあるいは垂直な方向性を持つというように、展示空間のような性格をあたえているような場所をぶらぶらできるように考えた。教育普及活動を目的としたアトリウム群も、視線が交錯したり人びとが歩きまわるように、あたかも都市の中を散策したり、カフェにいるような場所をつくりたかったということだ。

ヨーロッパの典型的な都市は、骨格がはっきりしていて固いから、かえって人びとの動きや行動といった空間の流動的な面を助長してやる。街の表情はずっと生き生きとしてくる。アジアの都市は、それに比べれば空間自体がすでに流動的である。

人間自体もまた異なる。われわれは毎度のごとく、プロジェクトの内部に深く流動的に取込まれ時間の流れさえも一体化するのだが、彼らにとってはプロジェクトはあくまでも他者であった。きちんと家に帰るし食事をする。本来は、あたりまえのことだがちょっと歯がゆい。加えて今回の東京チームの面々は一年生ばかりの弱小チームで、こんな両者に挟まれて今やベテランの苦勞は大きいのだ。

東京にせよフランスにせよ、物事に対して、共通に同じイメージをもつことが如何に困難なことか、これまでプロジェクトをやってきて感じたことのあまりなかったギャップを大きく感じた。何を表現したいかを伝えるだけではだめで、表現する手法や手段を伝えなければならぬのだ。具体的にこれをこのように描けと言わないと、欲しいものが出てこないのだ。能動的な共通に正しい判断のできるローカルな司令系統ネットワークを構成していてこそ強いチームというものだ。今の状態はチームではない。最終段階で現地に着いた時、それまでであったと思っていた共通理解が実は小さかったことを思い知り、次に東京から離れて一年生たちをコントロールすることが如何に難しいかを知った。結局、自分で全部やるのが一番なのだ。ちょっと建築つてのはそうはいかないのだ。

帰りのフライトで、団体旅行のグループのひとひとと隣になった。ニースや南フランスを巡る旅行だったらしい。コートダジュールにツアーが組まれることなどがかつてはなかったが、近年はそうでもないらしい。北フランスに比べ

ればずっと温暖な気候に憧れる。

ニースに栗山茂という日本人の画家が住んでいる。バステルや油をつかって、キャンソんにキャンバスに人の顔ばかりを描いている。

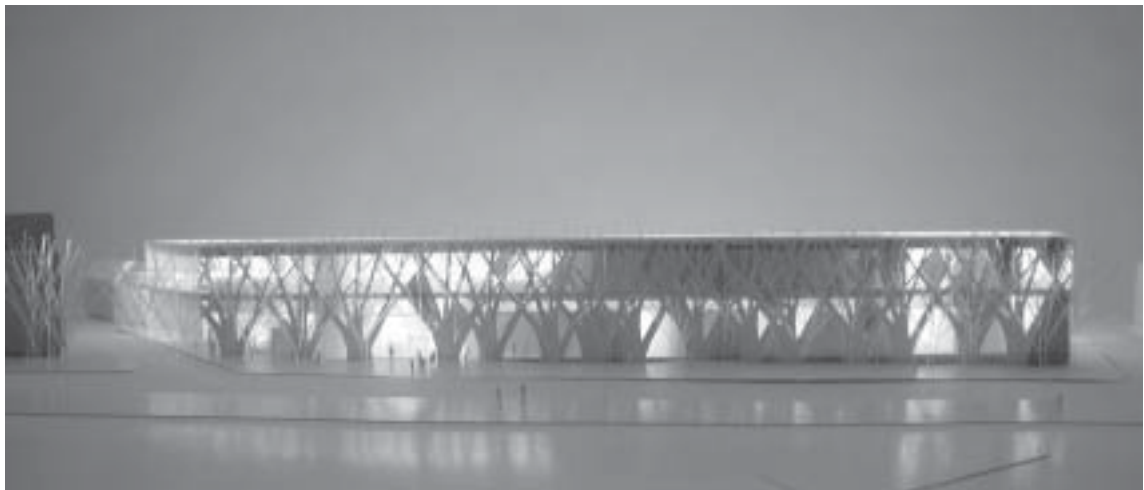
何枚も何枚も、同じような顔の絵を描く。一日に何枚も描くこともあるようだ。本人に訊ねると、ある瞬間に何かが天から伝わり、勝手に手が動きだすらしい。すごい勢いで描ききってしまうという。



キャンバスに描かれたものは、確かにひとの顔ではあるが、どうもそのような具体的なものには見えない。そうではなく、流れ漂う空気や光そのものようにすら見える。それらを一瞬のうちに捕まえて、平面上に現したもののようなのだ。夏に描かれた赤いバステル画の顔シリーズがある。ピンクや緑の様々な色のバステルのシリーズもある。これらは寧ろガタリが評するように、森の中の精霊を感じさせる。一方、冬に描かれた黄色い油の顔シリーズがある。このシリーズの顔からは、弱いが凜とした光と空気を感ずる。行ったことはないのだ。

一月は光の月だという。冬至からひと月程しか経たないが、格段に昼間が長くなる印象がある。一月ひと月で昼は四十分ほど長くなるが、二月には一時間長くなる。三月以降も同じようなものだから、春への大きなジャンプをするものになる。二月のニースでは、街も賑やかさげず落ちていて、海からたくさん降り注ぎはじめた光を暖かく感じるのだろう。日本では立春である。

(篠崎健一)



# some と any の怪

入国係官：

Basically, we welcome any visitors.

「基本的に、私たちはどんな訪問客も歓迎しています」

But we don't welcome some visitors.

「でも、歓迎しないお客さんもいるんです」

Could you show me some evidence-

「証拠を見せてくれますか」

トリ：

What evidence?

「何の証拠を？」

係官：

-that you are not infected?

「あなたが感染者じゃないって言う」

.....

何でも無い入国審査における会話のようだが、最初の係官のセリフ中の any と some に注目してほしい。あなたは中学でこう習わなかっただろうか。

「some と any は両方とも意味は同じで『いくつか(の)入 いくらか(の)』。ふつう、肯定文では some、否定・疑問文では any を使う」。

たとえばこんな感じ。(実のところこの用法の場合、some を訳す必要はないのでカッコに入れてある)

I have some secrets.

「ぼく(いくつか)秘密もってるよ」

I don't have any secrets.

「ぼく秘密はぜんぜんないんだ」

Do you have any secrets?

「きみ(いくつか)秘密もってる？」

ところが、係官の使い方はその正反対である。肯定文で any が、否定文、疑問文で some が堂々と使われている。そう言えばあなた自身、中学から高校と学び進めていくうちに、似たような例に突き当たった覚えはあるはずだ。

We love any students.

「私たちはどんな生徒でも愛しています」

I don't like some teachers.

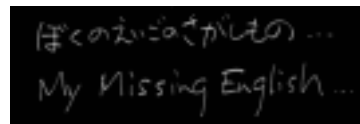
「私、好きじゃない先生もいるのよね」

Would you like some sweets?

「甘いお菓子ほしいかい？」

これは怪しい。最初に習ったルールがことごとく無視されているのではないか。そうあなたが思うのも無理はないが、実は、どれも少しも特殊ではない、ふつうの英語だ。どうなっているのか？それはつまりこういうことなのだ - - -

肯定文の any は「どんな～も」(非限定)



学校英語にわすれものありませんか？

否定文の some は「いくつかの」「いくらかの」と訳す。(限定)

疑問文の some は、yes の答えを期待するときに使う。特に意味はなく訳す必要はない。

さらに実例を。まずは肯定の any から。

I can laugh at any jokes.

「ぼくはどんな冗談にも笑える」

Any of my academic records are true.

「私の学歴はいずれも真実です」

どちらも後ろの名詞を限定せず、「どんな～も」という意味だ。

次は否定の some。

I can't laugh at some jokes of yours.

「きみの冗談には笑えないのがある」

Some of your academic records aren't true.

「あなたの学歴のうちいくつかは真実ではありません」

どちらも直訳ば「いくつかの・・・は、～ない」だが、「～ではない・・・がある」でもOK。

最後に疑問の some。

Can you laugh at some jokes of mine?

「ぼくのかいにくは笑えますか」

- Yes, we can. 「ええ、笑えます」を期待。

Did some of my tears work?

「俺の涙の幾粒かは通じたかな？」

- Yes, they are. 「ええ、効きましたよ」を期待。

いずれも肯定の答えを期待している。

(最終面に続く)



All We  
Need Is  
Love

(七面から続く)

その他、単体の any や some だけでなく、someone, anyone などの合成語でも、やはり必ず「肯定文 = some-, 否定・疑問文 = any-」というわけではない。先と同じことが当てはまる。

Such a disaster can happen any day, anytime, any place.

「このような大惨事は、どんな日にも、どんな時にも、どんな場所でも起こり得る」

I don't want to see someone jumping out of the building one after another any more.

「もうビルから誰かが次々に飛び降りてくるなんてのは見たくないね」

Is there something that you can trust?

「あなたには何か信頼できるものがありますか」

- Yes. I have... 「はい。私には・・・」を期待。

(望月)

**Kanna**  
あいらんど商店街  
新井薬師前駅→  
中野区新井1-30-6  
第1三宮ビル1F  
Tel: 03-5343-1316

営業時間  
平日・土曜日 11:30~15:00 / 17:30~25:00  
日曜日 17:30~25:00  
定休日 毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

プレオープン期間を経て、10月15日グランドオープン!!

「自分の行きたいお店が欲しい」

呑むの好き。人と話すの好き。

酒好きの仲間とともに自分のりそうの飲み屋を作りました。

飲み食いだけでなく、自作の美術品等の展示や、

ミニライブ、ろうどく劇等にもお使いいただけます。

ながら、珍しくシリアスにかいた音楽が、彼女の耳には恋のメロディとして響いたのである。もちろん、どういふメロディなら死を意味する、こつこつメロディならラヴ・ストーリー、などという具体的な何かがあるわけではないし、私の表現能力が低いゆえに感覚が捻じれているということも影響しているだろう。私はがっかりしたのだろうか。いや、実のところ、率直な意見を聞かされてもらえて非常に嬉しかった。誰もが自由に創作し誰もが自由に感受できるもの、それが藝術なのだ。だから、彼女が予想外の感じ方を示すのは、つまり、人間は自由だということの一つの証でもあるのだから。創作する私の意図するところのものと、感受する彼女の受け取ったものが一致しないのは、ある意味では当然のことである。彼女と私は多少の時間と空間を共有しているとはいえず、別の人間なのだ。

ハンプティ・ダンプティを引き合いに出すまでもなく、私の作品は他者にどう思われようと私にとっては私の意図しようとするものを意味するのだし、そういう意味で表現者は王様なのである。また逆も真なりとでも言うべきか、受け取る側も作者が何を言おうとも作品から感じたものを感じるばかりであり、その感じ方は全くの自由。鑑賞者もまた王なのだ。もちろん、送り手と受け手の思うところ、感じるところが、一致しないまでも多く重なるのであれば、それは稀代の僥倖だと考える人が多いのかもしれないが、一致しないことだって幸福なことだと、私は言いたい。

藝術に関しては、人は基本的には無限に自由である。しかしながら、日常においては何でもかんでも自由というわけにはいかない。好むと好まざるとにかかわらず、多くの約束事を守らなければ社会という群棲生活は成立しない。例えば、時間や貨幣のシステムを自分勝手な解釈で曲げてしまふことは全く不可能だというわけはないけれど、殆どの場合、社会には受け入れられない。万が一、そんなことが横行してしまつたら、著しい社会不安に陥ることは必至だ。そこで、重要な規則

**Ken-ichi Shinozaki,**  
architect

Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp  
篠崎健一アトリエ

編集後記  
からす新聞第六巻第一号、通巻第六一号、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇四年二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

**ウアス**

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451

宝仙寺  
ファミマ  
おうめかいどう  
中野坂上駅